

第四課

「こう祈りなさい

模範的な祈り

「だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。……』」

(マタイ六・九)

教師ならだれでも実例の力を知っています。教師は子供に、何をすべきか、どうそれをなすべきかを教えるだけでなく、どうしたらそれを成し遂げることができるかをも教えます。私たちの弱さを顧みてくださる天の教師は、私たちが神に近づく時に携えて行くべきことばそのものをお与えくださいました。そのことばは、永遠のいのちの新鮮さと豊かさが息づく祈りの形式になっています。それは、子供でさえも口ずさめるほど簡単で、しかも神が与えてくださるものすべてを包んでいるほど豊かなものです。これは、他のあらゆる祈りの模範となり、靈感を与える祈りの形式です。私たちは神の御前において、たましいの奥底からのことばを発する場合、いつもこの祈りへと引きもどされるのです。

「天にいます私たちの父よ。」この祈りのことばを正しく理解するにあたって、聖書に出てくる聖徒の中で、神を自分の父とあえて呼んだ者はいなかったことを思い起さなければなりません。この呼びかけのことばは、御子がおいでのになって、御父を私たちの父としてお示しになったというすばらしい啓示の中心に私たちを置きます。このことばの中には、キリストが私たちを神の子とするために私たちをのろいから救い出してくださいとくださったという贖いの奥義、御霊が私たちに新しいのちを与えて新しく生れさせてくださったという新生の奥義、贖いが完成し、理解される前から、これから来らんとする恵みの経験に備えるために弟子たちの口にみことばが与えられたという信仰の奥義などが含まれています。このことばは、この祈り全体の、またあらゆる祈りのかぎです。それを学ぶには時間がかかります。一生涯かかります。更にそれを完全に理解するには、永遠という時間が必要でしょう。神の、父としての愛を知ることとは、祈りの学校での最初の最も簡単な学課であると同時に、また最後の最高の学課でもあります。祈りは生ける神との個人的な関係と、神との親しい個人的な愛の交わりによって始まるものです。力ある祈りは聖霊によって啓示された、神が父であるという知識のうちにこそ根ざし、成長するものです。また祈りの生活の喜びは、無限の父の無限の優しさとあわれみと忍耐、また、私たちの祈りを聞いて快く助けようとされる御父の愛のうちにこそあるものです。私たちは、御霊がこのことば「天にいます私たちの父よ」を私たちの霊とし、まこととして、心と生活を満たしてくださいさるまで、時間をかけて求

めようではありませんか。そうすれば、私たちは、実際に、幕の内側、すなわち祈りが常に勝ち得る力のもととなる密室にいることになるのです。

「御名があがめられますように。」ここには、私たちの注意を喚起する何ものかがあります。普通私たちは祈る時、まず自分の必要を神に訴え、その後、神について、また神が関心を持っておられることを考えます。しかし神は、この順序を反対にされました。まず、御名、御国、みこころであり、次に、お与えください、お赦してください、お導きください、お救いくださいとなります。この学びは、私たちが考えるよりはるかに重要です。真の礼拝においては、御父が第一であり、また、すべてでなければなりません。御父があがめられるために、自分のことを忘れるということ学ぶなら、その祈りはただちに多くの祝福をもたらすものとなります。御父のために犠牲を払って損をした者は、一人もいないのです。

このことは、私たちの祈りのすべてに影響を及ぼすものでなければなりません。祈りには個人的な祈りととりなしの祈りの二種類があります。私たちはとかく、私たちの時間やエネルギーを後者に用いることが少ないものです。このようであってはなりません。キリストが祈りの学校を開かれたのは、特にとりなしの祈り手を訓練し、その信仰と祈りによって、世界中に主のみわざと愛の祝福をもたらすためなのです。このことが目標とならない限り、私たちの祈りに大きな成長を期待することはできません。幼い子供は、ただ自分に必要なものだけを自分の父親に求めま

長を期待することはできません。幼い子供は、ただ自分に必要なものだけを自分の父親に求めま

す。しかし、いつかは、自分の妹のためにも求めるようになります。更に、父親のために働き、その仕事を任せられるようになった青年は、もっと多くのものを求め、それを自分の手に入れます。イエスは、私たちを献身と奉仕の祝福された生活に入らせようとして訓練をしてくださいます。この生活においては、私たちの関心はすべて御父の御名と御国とみこころに従属します。これを求めて生きていきましょう。「私たちの父よ」の後に、御名と御国とみこころということばを続けなさい。これこそ、私たちが望み、慕い求めているものだからです。

「御名があがめられますように。」なんという御名でしょうか。「父」という新しい御名です。

第4課 模範的な祈り

「聖」ということは旧約聖書における中心のことばであり、「父」という御名は新約聖書の中心のことばです。この愛の御名の中に、神のあらゆる聖と栄光が現されようとしています。どのようにしてこの御名をあがめたらよいのでしょうか。それは、「わたしは、あなたがたが汚したわたしの大なる名をあがめる」と仰せになった神御自身によってであります。私たちの祈りは、私たちのうちにも、またすべての神の子らのうちにも、この世に対して、父の御名の聖さと神の力と隠れた栄光とを現していただくものでなければなりません。父の霊は聖霊です。私たちが、自分自身を聖霊にゆだね、導いていただくことによってのみ、私たちの祈りと生活において御名があがめられるのです。「私たちの父よ。御名をあがめさせてください。」この祈りを学びましょう。

「御国が来ますように。」御父は王であり、その王国を所有しておられます。王子や王の後継者にとって、自分の父の国の栄光以上に望むものはありません。戦いや危急の時には、それが彼の情熱となり、その他のことは何も考えられなくなります。御父の子らは、今敵の領土の中にいて、天の御国はまだ完全に現れていないのです。したがって、御父の御名をさがめることを学んだ時、「御国が来ますように」と、熱心に求めるようになることは、むしろ当然です。御国の到来は、御父の栄光の現れと、御父の子らの祝福と、この世界の救いがかった一大事件です。しかも、御国の到来はまた、私たちの祈りにおいても待たれているのです。「御国が来ますように」という、贖われた者たちの熱心な叫び声に、私たちも参加しましょう。イエスの学校でそのことを学びましょう。

「みところが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」この願いは、神のみところを行くことで苦しまれた時にのみ適用されがちです。天においては、神のみところが行われている。主は、その子らに、神をあがめ、喜んで服従する精神をもって、みところが天で行われるように地でも行われることを願うようにと教えておられます。神のみところは天の栄光ですから、それを行うことは天の祝福ということになります。みところが行われる時に天の御国が心の中にやって来ます。信仰が御父の愛を受け入れる時には、どこにおいても、従順が御父のみところを受け入れるのです。天におけるような従順な生活に身をゆだね、それを求めて祈ることは、

ろを受け入れるのです。天におけるような従順な生活に身をゆだね、それを求めて祈ることは、

子供のような祈りの精神です。

「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。」子は、御父と御名と御国とみこころのもとに、心から自らをゆだねる時に、日ごとの糧を求める自由を得ます。主人はしもべの、將軍は兵士の、父は子供の糧のために心を配ります。それなら、天の父が、父の栄光を求めて祈る子らの面倒を見ないはずがありません。私たちは確信をもってこう言うことができます。「御父よ。私はあなたの栄光とみわざのために生きる者です。私はあなたが私を顧みてくださることを知っています。」神と神のみこころへの献身は、地上の全生涯を御父の愛に満ちた御手にゆだねることですから、この世の物質について求める場合、驚くほどの自由が与えられるのです。

「私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。」ちようど糧が肉体にとって第一に必要なように、赦しはたましいに必要なものです。そして、糧が与えられるように、赦しも与えられます。私たちは神の子であると同時に罪人です。私たちが父のみもとに近づくことのできる特権は、尊い血潮と、それによって勝ち取られた赦しによるのです。赦しを求める私たちの祈りが形式的にならないように気をつけましょう。本当に告白されたものだけが本当に赦されます。信仰によって約束された赦しを受けましょう。それを靈的事実として、神と私たちとの間の実際的な取引として受け入れたいものです。赦しは、御父の愛と、子として受けるすべての特権への入口なのです。生きた経験としての赦しは、他の人を赦そうと

する気持なしにはあり得ません。赦されることが、神の子らの天に対する関係を示すように、赦すことは、神の子らの地に対する関係を示すものです。祈る時はいつでも、心から愛していない者は一人もいませんと言える者でなければなりません。

「私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。」私たちの日ごとの糧、罪の赦し、それに、すべての罪と悪の力から救われること、この三つの願いのうちに私たちの個人的必要のすべてが含まれています。糧と赦しを求める祈りには、すべてにおいて、御父のみこころに従って生きる聖い献身が伴わなければなりません。そして、あらゆることを信仰によって祈っていくためには、内住の御霊の力によって、悪の力から解放されていなければなりません。

神の子たちよ。イエスは、私たちがこのように天の父に祈ることを求めておいでになります。御名と御国とみこころが、私たちの愛の第一位を占めますように。そうすれば、与え、赦し、救ってくださる御父の愛が、確かに私たちのものになります。この祈りが、本当の子供としての生活、すなわち、父が子のすべてであり、子が父のすべてであるような生活へと導いてくれるでしょう。父と子、「あなたのもの」と「私たちのもの」がどのようにして一つになるのでしょうか。「あなたのもの」という祈りで始まる心が、どのようにして、信仰によって「私たちのもの」と叫ぶ力を持つのでしょうか。このような祈りは、実に親しい交わりまた愛の交換であって、常に私たちを礼拝させるようにするものです。「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからで

叫ぶ力を持つのでしょうか。このような祈りは、実に親しい交わりまた愛の交換であって、常に私たちを礼拝させるようにするものです。「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからで

す。アーメン。」御子よ、「私たちの父よ」と祈ることを教えてください。

ひとり子なる主よ。どうか、「私たちの父よ」と祈ることを教えてください。主よ。あなたが与えてくださったこの生きた恵みのことばを感謝します。幾百万の人々が、このみことばによって御父を知り、また礼拝するようになったことを感謝します。彼らが、私たちの大きな励ましとなってきたことを感謝します。あなたの学校で、この一つ一つの願いを学ぶために、数日ないし数週間を要します。一つ一つがあまりにも深く完全であるからです。私たちがただあなたに目を注いで、いよいよ深くその意味を知り得ますように。御名のゆえにお導きください。あなたの御名は御父の御子だからです。

主よ。あなたはかつてこう言われました。「父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません。」更に「わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これから知らせます。それは、あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にいるためです」とも言われました。主イエスよ。御父をお示しください。あなたの御名と、あなたを愛された御父の無限の愛を私たちにお与えください。そうすれば、私たちは、「私たちの父よ」と言えるようになります。

そして、あなたの教えを悟り、私たちの心から発する最初の自発的な息吹が、「私たちの父、御名、御国、みこころ」ということばになるでしょう。このような御父の愛が、すべてを顧みてくださることを信じて、私たちの必要や罪や試みを皆ことごとく御前に差し出します。

恵み深い主よ。私たちはあなたの生徒です。あなたによりたのんでいます。「私たちの父よ」と祈ることを教えてください。アーメン。